第12回数理社会学会論文賞の選考について

第12回数理社会学会論文賞の選考対象は、規程により2014年1月1日以降、2017年12月31日までの間に、『理論と方法』等の雑誌に数理社会学会会員（共著の場合も同様）が執筆した原著論文である。一般推薦および選考委員推薦によって候補となった合計12編について選考を重ね、最終的に、大﨑裕子・坂野達郎「一般的信頼のマルチレベル規定構造の変化―社会の工業化、ポスト工業化による価値変化の影響」（『理論と方法』31(1), 20-38, 2016）を選出した。

本論文は、一般的信頼の規定構造の分析を通して、社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）メカニズムの多様なあり方をイングルハートの社会変動論に接続して大きなスケールで描き出した、意欲的な計量社会学的研究である。信頼の規定要因については、制度信頼とアソシエーション参加の重要性が指摘されつつ、そのどちらがより効果をもつかについて知見が分かれていた。本論文では、世界価値観調査等を活用して延べ94か国9万人を対象にした大規模社会調査データの二次分析を行い、経済的発展度を考慮した国際比較の枠組みから、一般的信頼の規定構造を吟味している。具体的には前工業社会、工業社会、ポスト工業社会の3つの国家グループを設定し、制度信頼とアソシエーション参加のマルチレベル因子構造を吟味したうえで、それらの一般的信頼に対する規定力をマルチレベル・ロジステッィク回帰分析により分析している。その結果、前工業社会に比べて工業社会では個人レベルでも国レベルでも制度信頼の規定力が強いこと、また、ポスト工業社会は工業社会と同様の規定構造を示しつつ、制度信頼の多面性を示すことを見出した。そしてこの結果を、工業化による世俗的・合理的価値の高まりと、ポスト工業化における自己表現価値の高まりによるものとして、価値変容のダイナミズムから意味づけている。

本論文の評価点は次の２点にまとめられる。

第一に、計量社会学スタンダードとしての意義がある。社会調査データの二次利用、大規模な国際比較の調査枠組み、そして、まさにその枠組みにおいて力を発揮するマルチレベル分析。本論文は、スタンダード化しつつあるこうした計量社会学の先端的動向をしっかりとふまえて、適切なデータ整備と分析を行い、見事にそれらの利点を引き出している。調査法やデータ分析法に新たな発展をもたらすような貢献ばかりでなく、本論文のようにいわばお手本として、二次利用を行うならばこの水準は満たしてほしいという目標になるような研究の意義は大きいものである。

もちろん、スタンダードの意味合いはテクニカルな手堅さだけでなく、むしろ大きいのは、本論文が理論とデータ分析を有機的に関係づけたオリジナルな分析枠組みを提示している点である。本論文のベースには、２つの大きな理論的な議論がある。ひとつは社会関係資本論、とりわけ一般的信頼を規定するメカニズムの議論であり、いまひとつはイングルハートらの産業化と価値変容に関する社会変動論である。本論文はこの２つをデータ分析の水準でうまく融合し、それぞれに理論的に意義ある知見を戻すことに成功している（詳細は次の第２点）。このように理論的にオリジナルな貢献をなしうるか否かは、とりわけ二次分析においては生命線である。

第二に、上記のようなスタンダードをふまえて、スケールの大きな、なおかつ理論的に豊かな含意をもつ議論を展開している。まず、工業化による社会変動は決して単線的ではないが、とはいえそこに定律的な歴史変動パターンを発見しうることを、クロスセクショナル・データから説得的に示している。しかも、そこでの工業化と価値変容の関連性を、社会関係資本メカニズムの変化と多様化に結びつけることで、イングルハートの研究を理論的に一歩前進させている。

一方、社会関係資本論に対しては、一般的信頼が社会関係資本として意味をもつ文脈やそのメカニズムが、歴史的・政治経済的・文化的に異なることを示唆している。実際、政治信頼と秩序維持制度信頼の規定力が3つの国家グループで異なることは、様々な財を管理する制度や考え方の工業化の度合いによる違いを考慮するとき、財の供給や利害調整における協同課題（一般的信頼が重要となる課題）の違いという観点から、読み解くことができるかもしれない。これは中範囲理論的に興味深い本論文のポテンシャリティである。

選考委員会では、分析手法、概念、理論枠組みなどにおいて課題も指摘されたが、それらはむしろ今後の意味ある議論を触発するものだと判断した。なお、今回の選考委員会では若手奨励の趣旨を重視することを共通了解として選考を進めた。その趣旨に照らして、本論文で大﨑氏が第一執筆者であることの実質を重視したことを注記しておきたい。また、今回、女性研究者が初めて受賞することになった。これを糧に数理社会学会で今後ますます女性研究者が活躍することを期待する。